
森の国の物語

気まぐれな黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の国の物語

【コード】

N5279M

【作者名】

気まぐれな黒猫

【あらすじ】

森の奥にひっそりと築かれた王国で、色々と騒がしい日々を送る

青年の物語

第一話：プロローグ

最果てと呼ばれる大陸最北端にある常闇の地に対峙する二つの人影があつた。

双方共に黒髪黒目の青年ではあるが、片方は黒い禍々しい剣をもち悠然と相手の青年を視界に捉えている。

対するもう一人の青年は神々しい光を纏う白い剣構え、相手を睨み付けていた。

「今代の勇者に一つ助言をやるう」

緊迫する空気ははりつめる中、禍々しい剣をもつ青年が口を開いた。

「魔王を倒した勇者はどうなると思つ？」

「・・・・・・・・」

「簡単なことだ、次の魔王になるのさ」

「・・・・・・・・」

「勇者の力はこの世界では強大すぎる。最初は感謝されていても次第に戦略兵器として扱われるようになる、なまじ不老なぶん、ね」

「・・・・・・・・」

「悠久とも言える時の果てで同郷の者に会えた。これで心残りはなくなつた、お喋りはここまでにして決着を着けようか」

黒い剣がチャキリと音をならす。
それに伴い白い剣も輝きを増す。
そして、一拍の後白と黒の剣がぶつかった。

日の光が差し込まないほど分厚い雲が空に停滞し、一年を通して薄暗い地域として人々に知られる土地最果て。

日が差さぬため大地は冷たく、植物が育たない死せる荒野となっていた。

そんな最果ての荒野の真ん中にポツリと地に付きたてられた一本の剣がある。

黒い刀身に巧みを凝らしつつシンプルな塚を持つその剣は見るものを引き付ける魅力があり、同時に手にすれば正気を失うだろうと思わせるほどの禍々しさを纏っていた。

普通ならば半刻もせずに持ち去られてしまうようなものではあるが、場所が場所だけに今でもこうして剣は地に刺さったままだ。

大陸にその名を馳せた殺戮者も、各国から指名手配を受ける大盗賊も、世界最強と謳うたわれる傭兵でさえもその足を向けることしない。それほどに人々から恐れられる最果ての荒野に一人、青年の姿があった。

迷いのない足取りはまっすぐに剣の元へと向かっている。

しばらくして剣の元へとたどり着いた青年はその場に座り込む。

「よう、久しぶりだな」

座り込んだ青年は徐に、剣へと言葉を投げかける。

それから青年は他愛もない話から近代報告までを済ませると立ち上がり、腰の鞘から剣を引き抜いた。

そして、どこからか取り出した白い石版に剣先で文字を彫ってゆく。

文字を彫り終えた石版を黒い刀身の前に置き、青年が持つ剣もその場に突き立てた。

「今更だが、あんたが最後に言った言葉の意味がわかったよ。それでも俺は……………」

青年のつぶやきは荒野に吹いた風にかき消されてしまった。

それでも満足そうな顔をした青年は来た時と同様に迷いのない足取りでその場に背を向けて歩き出した。

後に残された白い石版にはこう記されていた。

三代目が勇者、ハルキ・ミズシマ並びに四代目が勇者、シュウヤ・ツキシマここに眠る

第二話：森の国

「今日も平和だねえ〜……………」

降り注ぐ日差しが木の葉にさえぎられ、柔らかな木漏れ日となって大地を暖める。

その木漏れ日を作る日溜りの中に寝そべった青年が誰にもなくつぶやくと、何処からともなく声が聞こえてきた。

「何が「平和だねえ〜」ですか、またこんなところでサボってからに。いい加減仕事してくださいと何度も申し上げていると言つのに」

青年は緩慢な動作で目を開くと、声の主をちらりと見やった。

「お〜宰相、今日もご苦労。して、今回は何用かな？」

宰相と呼ばれた人物は、尖った耳に深緑の瞳と髪を持つエルフの青年だった。

「ラザフ殿が面会をと着ております陛下」

「あ〜…………もうそんな時期か。分かったすぐ戻ろう」

寝転んでいた日溜りから起き上がり服についた葉を落とすと、簞え立つ大樹目指して歩き始めた。

宰相と呼ばれたエルフの青年もそれに半歩遅れて着いていった。

人の手がいある事のなかった大陸一の大森林・神秘の森。

その森の中心に聳え立つ世界樹と呼ばれる直径十数キロ、樹高600メートルにもなる木の洞に造られたユグドラシル城。そこを中心に半円状に広がる王都アルフヘイム。

ふと街の中へ目を向ければそこには多くの種族が暮らしていた。緑の髪と瞳を持ち、尖った耳をしたエルフや1メートルにも満たない身長にトンボのような透明な羽を持つピクシー、たくましい体躯で身長が低いドワーフなどの精霊属。

ワーフルフやワーパーなどの二足歩行で毛皮に覆われた獣顔の獣属。ハーピーのような足が鉤爪状になっており、顔は鳥のままで腕と翼が一体化した鳥属。

さまざまな種族が暮らしているアルフヘイムだが唯一人属の姿だけが見当たらない。そこは、唯一人属以外の種族が暮らす森の国なのだ。

そんなアルフヘイムを堂々たる足取りで闊歩するのはやはり言うか先ほどの青年と宰相である。

「国王ともあろうものが護衛の一人もつけずに出歩くななど、万一のことがあったらどうするのです」

「お前もいい加減しつこい奴だな、俺に万一なんてことがないことなんて分かりきったことだろう？」

「しかし！」

なおも反論をしようと宰相が口を開いた瞬間、その口に何かが飛び込んできた。

思わず嘔んでしまった後、口に広がるあまりの苦さに吐き出しそ

うになるのを何とか堪えて飲み込んだあと、実行犯であろう人物を探す。

「誰です！ こんなことをするのは！」

「誰って、決まってんじゃねーか。ほら、あそこ」

そう言って指差されたのは街中に点在するコサの木だった。

コサの木は1cmほどの実をつける木で、熟すととても甘い黄色い実になるのだが、熟す前だと気付として使われるほどの苦味を持つことで有名だ。

そんな木の枝に腰掛けた獣属の少年がこちらを見て笑っていた。

「ラストイ！ また貴方ですか！ 今日と言う今日は許しませんよ！」

宰相が手を前に掲げたところでラストイという名の少年は笑うのをやめ、枝から飛び降りるとさっさと逃げていってしまった。

「さすが猫族^{ネコ}、身軽なもんだな」

「逃がしましたか・・・まあいいでしょう。陛下、急ぎましようラザフ殿がお待ちです」

「はいよ」

二人は再び城へ向けて歩き出したが、たびたび似たような妨害を受け城に着くまでに宰相の青年はヘトヘトになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5279m/>

森の国の物語

2010年10月10日22時18分発行